

第一章 文化財と民俗

第一節 文化財と史跡

一 町の文化財調査活動

町指定文 化財候補 大間町に文化財保護条例が制定され、文化財審議委員会が発足したのは昭和五十一年（一九七六）で、その後第一集（昭和五十六年三月）、第二集（同六十年三月）、第三集（平成二年三月）、第四集（平成五年三月）と、四冊の『大間町文化財審議委員調査報告』が刊行されている。

それらは、失われつつある文化財を記録保存すると同時に、先人たちの知恵と努力と魂を継承していくべきであるとして、海とともに生きてきた漁民たちの創造物である漁具・漁法、風俗・習慣、大間原子力発電所予定地における埋蔵文化財（白砂遺跡）の試掘調査、町鳥かもめ（ウミネコ）の繁殖保護、寺院をはじめとする有形文化財の調査、神楽・踊りを中心とする無形文化財の資料研究など、多岐にわたった内容になっている。

報告書に紹介されている主な文化財について記しておく。

(一) 民俗文化財

- 仕事の用具（農・水田・畑作に関する各種用具）
- 漁具（各種舟、網、縄）

○ 牧畜用具

○ 林業用具

○ 仕事着

○ 染、織

○ 生活用具

○ 年中行事（食事と行事）

○ 社会生活（組・講の用具）

(二) 先住民族の遺跡

材木遺跡、小川代遺跡、焼畑遺跡、奥戸遺跡、大間遺跡、冷水遺跡、割石遺跡、烏ノ間遺跡、大間平(1)(2)遺跡、ドウマンチャ貝塚、白砂遺跡、四十八館跡、奥戸館跡、小奥戸(1)(2)(3)遺跡、二ツ石(1)(2)(3)遺跡、田頭遺跡、船橋遺跡、黒岩遺跡、奥戸上道遺跡

(三) 有形文化財（寺社の史跡）

〈大間地区〉弁天神社本殿（巖島神社）、弁天神社拝殿（弁天さま）、地藏さま（日和山）、法香寺、阿弥陀寺（勢至観音）、鹿島明神（鹿島ばさま）、竜神さま、稻荷神社（天妃さま・金毘羅さま）、福蔵寺、円融寺、蒼前石（蒼前さま）、春日弁天神社、普賢院（不動さま・薬師さま）

〈奥戸地区〉春日神社（若宮観音）、稻荷神社、信願寺、長弘寺、金毘羅宮、愛宕さま、八幡堂、崇徳寺、小滝大明神、地藏さま（小舎利浜）、行人塚

〈材木地区〉地藏さま、稻荷神社、矢森大明神、白山宮、塩釜明神

第1節 文化財と史跡



写真11-1 大間平1号遺跡



写真11-4 大間遺跡

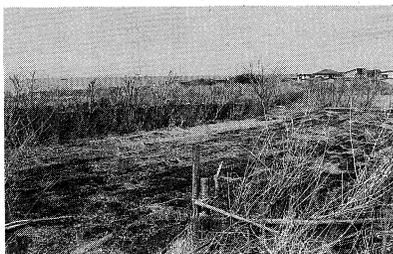


写真11-2 箔ノ上遺跡



写真11-3 黒岩遺跡



写真11-5 大間神楽



写真11-8 稲荷丸



写真11-6 奥戸神楽



写真11-9 仁和賀山



写真11-7 材木神楽

(四) 無形文化財(神楽・踊りなど)

- 大間稻荷神社神楽
- 奥戸春日神社神楽
- 材木稻荷神社神楽
- 大間盆踊り(唄)
- 奥戸盆踊り(唄)
- 材木盆踊り(唄)
- 奥戸餅つき踊り(唄)
- 材木餅つき踊り(唄)
- 世の中踊り(唄)
- チャンコ茶屋(唄・踊り)
- 稻荷丸(囃子^{はやし}・
木遣り^{きや})
- 仁和賀山(囃子
・木遣り)
- 大正山(囃子・
木遣り)
- 弁天丸(囃子・



写真11-12 布袋山

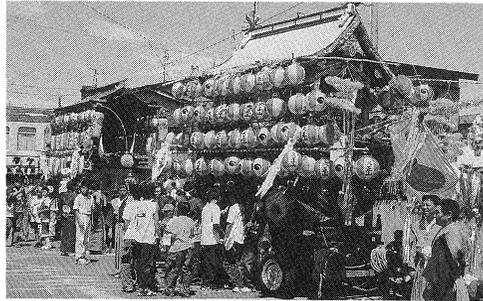


写真11-10 大正山

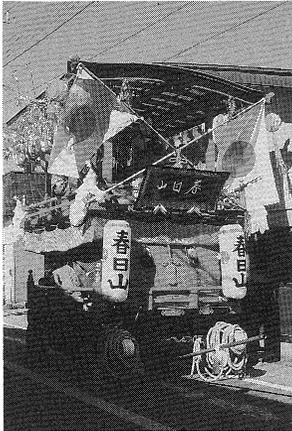


写真11-13 春日山



写真11-11 弁天丸

木遣り)

○布袋山 (祇園囃子)

○春日山 (囃子・木遣り)

○童唄 (まりつき唄ほか)

○伝説

大間町教育委員会、文化財審議委員会としては、今後も地域に根差した文化財保護に力を傾注していく計画である。現在も新たに町指定の文化財を選定するための委員会を継続開催しており、いずれは正式に大間町指定文化財が誕生する予定である。

二 文化財

下北の庚申信仰は、菅江真澄が下北の庚申について触れている日記がある。「おぶちの牧」寛政五年(一七九一)七世紀末ごろ 三)十月二日、大畑の日記に「二日、やのしりなる社の庚申の堂あるに、相しりたる人さわにいて、俳諧の連歌して空は更にふけゆく頃、われにも同じさまにあそびてと人のいえども、えやはそのみちたどらんとおぼつかなくも、衝聞きて寝ぬ夜まつらん神の室」。もう一つは『奥の冬ごもり』寛政七年十月六日の、田名部における日記で、「庚申すとして夜とともに語らふに鹿の声したるはいづこにやあらん。つま恋ふるならひはすれどこよひとて、鹿も寝ぬ夜を鳴きあかすらし」という文である。

大畑や田名部では、既にこのころから庚申の夜、人々が庚申堂や当番に指定された家などに集まって、歌を詠

んだり談論したりしていた様子がうかがえる。佐井村には宝永六年（一七〇九）と元文四年（一七三八）の庚申塔があり、大畑町には年代不詳だが形態から推測してそれより以前のものと思われる庚申塔があり、また川内町には明和三年（一七六六）の庚申塔があるなど、下北へは一七紀末から一八世紀初めに庚申信仰や庚申待ちの習俗が入ってきたものと思われる。

大間町の庚申塔は 庚申信仰は中国で古くから行われた道教の三尸説さんしに由来している。それは、人間の体の中の**奥戸に一基のみ**に三尸の虫がいて干支えと（十干と十二支）の組み合わせによって六〇日に一度ずつ巡って行く庚申かみまの夜、人間が眠っている間に三尸の虫が人体から抜け出し、その人間の罪状を天帝に報告してしまつたため、庚申の夜は眠らずに過ごすという習俗である。

この庚申習俗が日本に伝わってきたのは平安時代であり、平安貴族が庚申の夜に参集して酒宴を張る様子が、そのころの物語にしばしば登場している。時代が下ると、この習俗は貴族階級から他の各階層にも広がり、江戸時代には一般庶民の間に広まった。多くの場合、庚申講として講中がつくられ、それは現在も多くの地方で行われている。普通は一年に六回（年によって七回もある）の庚申の日、夕方から堂や当番の家に集まり、青面金剛などの掛け軸を掛け、般若心経やその他の経典を誦し、酒食を共にして徹夜で語り合うという習わしで、地方によっては年に一回か二回に省略するところもある。

この庚申信仰は、庚申塔の造営と密接な関係がある。この習俗が庶民や農民層の間に広まるにつれ、古来からの伝統的な自然石崇拜や塚の建設による信仰の表現法が、塔の造営供養という形になったものであろう。

下北の庚申塔のうち、造塔年代がはっきりしている最古のものは前記の佐井にある宝永六年（一七〇九）の塔であり、最新のものは川内町上小倉平にある大正六年（一九一七）のものである。

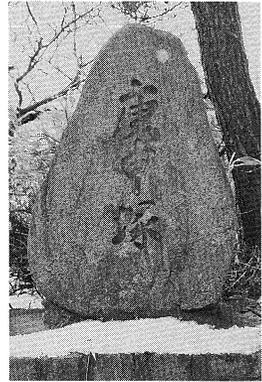


写真11-14 奥戸庚申塚

いの時間を過ごす。

四つの寺院 下北においては田名部神社にある康永四年（一三四五）の鰐口と、脇野沢悦心院にある応永十二年（一四〇五）の鰐口が、金石文の双壁であるが、大間にも弁天神社に正徳五年（一七一五）の

鰐口がある。ただ、俵物を運んだ帰路の船で、越前や江戸から大間に四個の半鐘が入っている。

○奥戸信願寺半鐘 嘉永二年（一八四九）越後の大久保歌代佐兵衛金肇作

○奥戸長弘寺半鐘 正徳四年（一七一四）江戸室町の森市太夫作

○大間阿弥陀寺半鐘 正徳四年江戸神田の西村和泉作

○大間福蔵寺半鐘 文久三年（一八六三）庄内の大山善左衛門作

大間町には、奥戸の春日神社境内の自然石に「庚申塚」と彫ってある小さな塔が一基あるだけである。ほかに刻文がないため製作年代は不明だが、もともとは奥戸を流れる大川目川の川岸にあったものだとわれている。奥戸では現在も集落がいくつかの講中に分かれており、それぞれ当番制を敷いて年六回の庚申の夕景から当番の家に集まり、青面金剛の掛け軸を掛けて庚申を祀り、飲食しながら夜半まで語り合

三 史 跡

遠見番所と 鎖国令とともに幕府は海辺の諸藩に沿岸見張番所の設置を命じた。異国船渡来の監視や海岸防備
台場の建設 のためのもので、北通に関係のある遠見番所の変遷を見ると正保二年（一六四五）の大間崎、元

禄十二年（一六九九）の焼山崎と大間崎、寛政五年（一七九三）・文化五年（一八〇八）の黒岩・牛滝となる。

遠見番所の新設・整備に加え、文化五年以後は沿岸の出崎（大砲場）が北通に一一か所三三艇設けられた。遠見番所と台場が関連しながら改廃を繰り返したものらしく、『宇曾利百話』によると四〇か所（うち北通三三か所）にも上る。

大間町（奥戸・材木を含む）に関する台場はかつて次の五か所に築造された。

○萱立場または道ノ上（大間村大間平）

○鳥居崎（大間村大間）

○高石（大間村高石）

○高磯（大間村高磯崎）

○日廻（大間村大間） 狼煙場

これらも、安政三年（一八五六）になると整理統合され、北通は大畑村湊浦、易国間村明神下、大間村高磯崎、佐井村岡弁天の四か所となった。

は、士官以下十余名を配備して監視哨を設け、これに対応したが、その陸軍監視哨跡が大間平の牧場側、県道に沿った松林の中にあつた。

明治三十八年五月には、大間崎端に海軍望楼を設置し、数名の下士官を配置し、もっぱらロシア艦船の警戒に当たつた。ここがその後の救難所となつたところである。

四 石と碑

津波を止めた 大間の薬師様の前に大石があり、その石に穴があいている。

蒼前石の神秘 古い昔、大間に大津波があり、村人は西吹付山の頂まで逃げ延びた。そこにあつた大石で津波を受けると、津波は潮の引くように去つたといふ。その日からの数十年後、この大石から一頭の白馬が生まれたといふ噂が立つた。馬は姿を消し、大石に馬の足跡がついた。そして間もなく、馬の足跡にたまった水で目の悪い人が目を洗うと、眼病が治るといふ噂が立つた。その効果は抜群だつた。

石のところから津波を止めたところから「浪除け石」「波切り石」、馬産地であつたことから「蒼前石」、そして石の傍らに建てた薬師堂の名を取つて「薬師様



写真11-16 春日神社境内に据えられる
浄水盤



写真11-15 蒼前石

の大石」などと呼ぶようになった。

飢饉を救った 奥戸の春日神社境内に天然石でできた珍しい浄水盤がある。

浄水盤の話 天明飢饉（一七八一〜八九）のころ、亀吉丸という千石船がお蔵米を積んで江戸へ向かう途中のこと。津軽の港を出るとほどなく天候が急変し、にわかにも暴風雨に襲われた。烈風と激浪のため帆柱が折れ、船は壊れ、奥戸の鯨場海岸へ叩き上げられたとき、船体は真っ二つに割れていた。村民が連絡よく救助に駆け付けたため、死傷者を出さずに済んだが、江戸へ回漕する予定のお蔵米は水浸しとなり、商品価値を失った。このとき役人の指示により、人命救助に活躍した奥戸の人たちに、このぬれ米が払い下げとなった。五穀すべて凶作という飢饉に泣いていた村人にとって、このぬれ米は大変な贈り物となった。

このとき、お蔵米と一緒に亀吉丸に積まれていたのが天然石の浄水盤であった。その大きさは長さ四尺五寸（約一三五センチ）、幅三尺三寸（約一〇〇センチ）、高さ二尺一寸（約六五センチ）、水をためる池の部分の深さ九寸（約二八センチ）、重さはおよそ一五〇貫（約五〇〇キログラム）であった。

村人たちは沈没した破船とともに海中に没していた浄水盤を引き上げ、春日神社の境内に運び込んだが、あれほど重いはずの自然石がごく軽々と運べたことに驚いた。そして「石に心があって、春日神社の境内に据えられることを喜んでるのだ」と、村人たちは噂し合ったという。

奇跡の霊験 およそ二〇〇年前、奥戸の若宮観世音の別当に金剛院正信という

金剛院の碑 法力自在の法印がいた。呪文を唱えれば沖を通る船を止めること

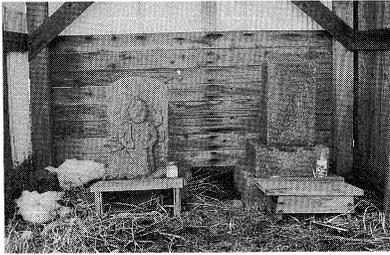


写真11-17 金剛院正信の墓

ができたし、逆風を順風に変えることも、干天に雨を降らせることも意のままであった。乞われて北海道の松前あたりにもしばしば漁の祈禱に出かけていた。

若宮観世音は現在の春日神社である。毎年七月十日に神事の相談が行われ、七月十七、十八日の二日間に祭礼が催された。ところが七月五日すぎから連日、激しい東風が吹きまくって海上交通は完全に遮断されていた。松前へ祈禱に出かけている金剛院も、この悪天候では奥戸へ戻れそうもなかった。九日の夜になって村人たちは「金剛院殿も明日の相談にはとつてい間に合わないだろう」などと噂し合った。しかし十日の明け方、逆巻く激浪のかなたからポーポーとほら貝の音を響かせながら、金剛院を乗せた船が悠然と奥戸の浦に入ってきた。法力の前に、逆風激浪も全く無抵抗だったのである。

金剛院の悲劇は、跡継ぎの子供がいなかったことであつた。いかな法力をもつてしても、こればかりは自由にならなかつた。年齢を重ねるほど、このことが彼の苦しみになっていった。老いれば老いほど焦燥感は募り、苦惱は重圧となつて金剛院の心身を衰えさせた。起居もままならずついに病床に就き、村人たちは毎日二人ずつ交代で看護についた。だが、文化十三年（一八一六）正月二十二日の正午、看護番の男が昼食で自宅へ帰っている間に、金剛院は朱の衣をまとい、錫杖しやくじょうを鳴らしながら観音堂に火を放ち、呪文を唱えながら火中に没した。

黄金屋の持ち船善鏡丸が新潟へ向かうことになり、船頭の三左衛門は金剛院の碑を注文するという大役を負つて出発した。ところが彼は航海の途中で、碑に刻む文面を記した書付を紛失してしまった。その夜、悔いにさいなまれていた船頭の夢枕に金剛院が現れ、「かくかくしかじか刻むべし」と告げてくれた。

文化丙子年正月二十二日

権大僧都金剛院正信法印

七十二歳入火定放光三世

この碑は蛇浦越の登り口に建てられた。

金剛院の入寂後も村民たちはその徳を慕い、その念力を信じ、願い事があればこの塚に詣でる。そして信じられないほどの靈験を施されているという。

第二節 伝承文化

一 郷土芸能

大間町には大神楽・御神輿・囃子・踊り・太鼓などの郷土芸能があるが、神社や寺院の歴史がさほど古くないという背景もあつて、その発生は享保（一七一六～三六）のころから昭和に至るまで、まこと新旧のバリエーションに富んでいるという特徴がある。

(一) 大間稲荷神社大神楽

いつごろどこから伝わったものか、詳細については不明である。一説によれば、享保十五年（一七三〇）に稲荷神社を勧請した能登屋市左衛門が松前から大間へ渡ってきた人であるところから、松前から伝来したものでないかといわれている。

正月元旦、一月十一日の船魂祭、四月三日の弁天神社祭、七月二十日の大漁祈願祭、九月一日の二百十日祭、十一月二十三日の勤労感謝祭、大晦日の除夜祭などに大神楽（獅子舞）を奉納している。また、当社では毎月三日（弁天様）、二十三日（天妃様）に月次祭を行っている。正月二、三、四日と、八月の大祭（九～十一日）

には氏子の家々の門打ちを行い、新築や落成式などの式典には屋固めの獅子舞が行われる。

当日は大神楽堂で大太鼓・小太鼓・鉦・笛を演奏し、神社銘旗を先頭にして法螺貝、五色の幣帛、鈴の付いた小型の宝剣、宝珠を頂いた獅子頭を振って歩く。山伏系の能楽と異なった趣のある大神楽で、奥戸や材木のものもおよそ同系統である。

(二) 大間稲荷神社御神輿

寛政六年（一七九四）に越中から大間、易国間、下風呂へ入り、奥戸には越後から入ったと『風土年表』にある。大間稲荷神社の記録によれば、寛政九年に壮巖極まる神輿の渡御が行われたという。神楽の演奏器具は前項とほとんど同じである。

(三) 大間稲荷丸囃子

流れるような情緒ある祇園囃子系の囃子である。楽器は鼓二人、鉦二人、笛二人、大太鼓二人、小太鼓二人で、以前使われていた出車は一八〇年以上前に作られたものだったが、現在使われているのは一一〇年ほど前に新たに作られたもの。これに御神体として恵比須様を乗せている。通称「船山」（「本山」とも）と呼び、総勢五〇人ほどの人手が必要である。

(四) 大間仁和賀山囃子

稲荷山よりややテンポの速いのが特徴で、山車は明治二十七年（一八九四）ごろに浜町で作られたものであり、

当時は賑山にぎやまと呼んでいたらしい。できたころは屋根がなかったが、昭和になってから屋根が付いた。御神体として大黒様を乗せている。囃子方の人数は他の山車に準ずる。

(五) 大間大正山囃子

明治三十年（一八九七）ごろ作られたもので、屋形の代わりに花で飾っていたため「花山」と呼んでいたが、大正時代に山車を大きくしたので「大正山」と呼ぶようになった。今は屋根が付いている。御神体として当初は弁天様を乗せていたが、その後しばらくは亀に乗った浦島太郎となり、現在はお船玉様を乗せている。笛二、三人、鉦一、二人、太鼓一、二人が交代で囃子を演じており、大正山独特の味を生かしている。

(六) 大間弁天丸囃子

山車は昭和になってから作ったもので、当初は弁天山として運行していたが、終戦後新たに船形にして「弁天丸」と呼ぶようになった。御神体は弁天様を乗せている。笛二、鉦一、太鼓一、小太鼓二の六、七人が交代で囃子を演じており、近年後継者難のため、小学生の養成に努力している。

(七) 奥戸春日神社大神楽

寛永十六年（一六三八）、飛驒高山を経て越後から奥戸に入ってきた若宮観音を警備してきた越後人たちが、勧請記念として教え残してくれたのが始まり。このとき一緒に祇園囃子や世の中踊りが伝わったとされている。山伏系ではない流暢な趣が特徴である。

(八) 奥戸布袋山祇園囃子

京都祇園の八坂神社祭礼の囃子に似ている。太鼓二人、鼓二人、鉦二人、笛三人の構成で、笛以外の六人が掛け声を掛ける。

(九) 奥戸世の中踊り

源平の戦で戦死した人々の霊を慰めるための念仏踊りの一種といわれ、飛騨高山の盆踊りが基になっている。太鼓一人、手平鉦三、四人、囃子方数人、唄二〜五人が交互に唄う。八月十三〜二十日の間、大勢の踊り手が上仏町の路上で踊る。

(一〇) 奥戸餅つき踊り

昔、飢饉のあったときに次の豊作を祈念して始めたものといわれ、現在は正月や祝い事があったときに踊る。唄二人〜五人、小太鼓一人、手平鉦一人、囃子方二人、踊り手七人（うち一人が白、六人が杵を持つ）。

(一一) 津軽海峡海鳴り太鼓（故飛鳥亮作・全日本民俗舞踊連盟）

昭和五十七年（一九八二）八月五日、大間町制施行四〇周年記念式典で初めて発表された新しい郷土芸能である。ゆったりとした踊りを前面に押し出した春、和太鼓では珍しい三拍子で未明の昆布取り船出と波乗りを扱った夏、いさり火に豊漁船の秋、灰色の雲と骨までも凍らせる猛吹雪の冬——の春夏秋冬四部作で、季節に応じた漁師と漁船が醸し出す静と動の情感が、優しく勇壮に表現されている。二尺長胴太鼓三人、一尺五寸太鼓三人、

ねぶた三尺太鼓一人、二尺五寸太鼓一人、しめ太鼓三人。法被はっぴは漁師が使った大漁祝旗でこしらえたものである。
※同工異曲のものとして「奥戸春日神社御神輿」「奥戸春日山囃子」「材木稻荷神社囃子」「材木餅つき踊り」などがある。

第三節 民俗

一 年中行事

その町の特色は年中行事に表れるといわれるが、大間町においても一月の舟魂祭ふなださま、春秋の天妃祭、六月の延命地藏尊祭、七月の大漁祈願祭など、海と密着した生活ぶりのうかがえるものが多い。また、神樂の門打ち、厄払い、師走二十九日は餅をつかない日など、土地独特の行事には興味深いものが少なくない。

（一月）

○一日 初詣で、若水汲み。

○一日 奥戸神樂の門打ち（三日まで）。材木神樂の門打ち。

○二日 大間神樂の門打ち（四日まで）。

○五～七日 としな納め（しめ飾りや門松を取り外して神社へ納める）。厄年の人は一か月後にする。焼き物を神前・仏前へ供える。

○十一日 お舟魂祭（おふなださま）。大間では漁協主催で大型船の持ち主が神社で祈禱した後、各自の自宅で親戚・知人呼び馳走する。昔、親方が乗子を招いて一年の契約を結び慰労した名残の行事。

- 十五日 小正月。女の正月といわれ、昔ほど盛んではない。
 - 二十日 二十日正月。ごく一部の地域に残っている昔の行事。
 - 旧暦の一月三十日 旧正月。ごく一部で行われている昔の行事。
- △二月△
- 一日 厄払い。男四二歳、女三三歳の数え厄年の人は、宮参りして厄を払う。現在は学校の同期生が合同でクラス会を兼ね、神社で祈禱を行うことが多い。
 - 三日 節分。寺社や各家庭で豆まきが盛んに行われている。
 - 初午 初めの午の日、馬を連れて蒼前様にお参りしたが、馬がいなくなつて行事もなくなる。
 - 十五日 涅槃ねはん。昔は大人も子供も凧たこを作つて凧上げに熱中した。今はほとんどない。
 - 二十三日 新年祭。大間稻荷神社で春祈禱を行う。
- △三月△
- 三日 桃の節句。古くは漁師の祭があり、大間港内で舟競争が行われたが、現在は七月二十日海の日に行われている。
 - 六、七 竜神様。小滝大明神を祀る。
 - 十日 金比羅様。大間稻荷神社で祈禱。
 - 十五日 白山宮祭（材木）。大間の人で蛇浦の折戸神社に詣でる人が多い。
 - 十六日 オシラサマ。近隣の人が集まってオシラサマを遊ばせ、秋の豊凶を占ってもらふ。
 - 十八、二十四日 春彼岸。



写真11-18 大漁祈願祭

○二十三日 天妃祭。夏の七月二十三日にも行う。

〈四月〉

○二三日 大間弁天神社祭（さがさにち）、二日は宵宮祭で弁天神社祈禱。三日朝も祈禱があり、風の日は弁天島へ神楽の渡御、時化の日は大間崎の拝殿で祈禱を行う。

○十六日 農神様。おしとき（米の粉でつくる餅）を作る。

〈五月〉

○五日 旧五日が端午の節句。

○六日 薬師様大祭。今は一か月遅れて普賢院で行われる。花まつり。

○中旬 内山公園で大間桜まつり。

○中旬 さなぶり。水田の仕事が終了した慰労も含めて仕事休みの日。

〈六月〉

○一日 むげがら節句。甘酒節句ともいい、歯固めのために煎り米・干し餅を作る。

○五日 月遅れの端午の節句。魔除けに菖蒲や蓬を門前につるし、菖蒲湯に入る。

○第四日曜日 大間町民体育大会。

○二十三、二十四日 海上安全地蔵祭。大間の日和山にある海上安全地蔵尊に御神酒・赤飯・まるめ団子などの供物をあげ、安全祈禱を行う。

○二十三日 大祓祭。大間稻荷神社で祈禱。

〈七月〉

○七日 七夕。七回水の中を泳ぎ、七回赤飯を食べ、小豆飯あずまゐを神仏に供える。

○二十日 海の日。大間漁協は大間稻荷神社で、奥戸漁協は春日神社で大漁祈願の祈禱した後、御飯船、護衛船などの役船を定めて海上で安全祈願のお札入りを行う。漁船は幟のぼりを立てた満艦飾で、賑やかな踊りも混じり終日楽しむ。

○二十三日 天妃祭り。

○下旬 土用。丑の日に鰻うなぎを食べる。

○二十五〜二十七日 大間普賢院大祭。

〈八月〉

○七日 七日盆。

○八〜十一日 大間稻荷神社例大祭。八日宵宮祭・御神輿、四台の山車が神社前に集合して祈禱。九〜十一

日大神楽、御神輿と稚児行列、山車の運行。

○十三〜十六日 お盆。十三日ホゲ、十六日ホゲ流し、灯籠流し。期間中の夜、墓地において花火で供養する習慣がある。盆踊りもあるが昔日のような盛況ぶりは見られない。

○十五日 成人式。簡素化と帰省参加者を考慮し、一〇年以上前から夏に行われている。

○十六〜十八日 奥戸春日神社大祭。御神輿や山車を運行。

○二十日 二十日盆。

〈九月〉

○一日 二百十日祭。大間稻荷神社で祈禱。

○九、十日 材木稻荷神社大祭 神楽が全村を門打ちするが、御神輿や山車は出ない。

○十六日 農神様。おしとぎを作る。

○二十、二十六日 秋彼岸。おはぎやあんこもちを供える。近年墓参者が多い。

○旧八月十五日 十五夜。

○二十七、二十八日 不動尊大祭。成田不動様の分祀であり、普賢院で祈禱。

〈十月〉

○十日 金比羅祭（秋）。大間稻荷神社で秋祈禱を行う。

○二十七、二十八日 竜神様。大間竜神堂で秋祈禱を行う。

〈十一月〉

○一、三日 文化祭。文化の日前後に展示会・音楽祭・産業展など文化的行事を実施。

○十五日 七五三詣り。中旬の日曜日、神社で祈禱を行う。

○二十三日 勤労感謝祭。稻荷神社で祈禱と各種表彰が行われる。

○二十三日 おかおじ節句。太子講（大師講）といい、出稼ぎに来ている人たちを小豆がゆに豆腐汁、長いカヤの箸を添えて慰労する行事。

〈十二月〉

○五日 恵比寿様。魚料理や小豆がゆをお膳にして神仏に供える。

○六、七日 座禪詣り。

○九日 大黒様。豆しとき・黒豆・豆腐を供える。

○十日 材木稻荷神社冬祭。

○十二日 山神様。山仕事をしている人たちの祭。

○二十二日 太子さま（大師さま）。冬至。中風子防のため必ず南^{かぼち}瓜を食べる。

○二十五日 すすはき。一年中のごみを払い大掃除する。

○二十八日 餅つき。クニチモチと称して二十九日の餅つきを必ず避ける。

○三十一日 年越し（大祓祭・除夜祭）。年越しそばを食べる。準備のため三十日から神社の手伝いに出る。

※大間町ではほかに種々の神仏を信仰している人がおり、個人的な行事を持つているが、月日が一定していないため複雑で、定まった行事としては紹介が難しい。

二 民謡・俗謡

大間には、室町時代の風流踊りが元禄時代の歌舞伎の囃子方となって豊年踊りなどの踊り唄になったもの、初船おろしなどのときに唄う祝い歌、新築の地ならし歌としてお祝いに唄われたもの、宴席の座興で唄われたもの、それにわらべ歌など、時代も種類も雑多といえる俗謡が伝わっている。

(一) 世の中節(世の中踊り)

- 一 今年よい年
よい世の中で
たけは 一丈
穂は 五尺
- 二 七間四面の
長ばせかけて
あわ米かけて
喜ばせ
- 三 奥戸赤坂に
ききょう花さいた
ところご繁昌で
さいた花
- 四 佐井の澗を出て
奥戸の沖に
まぎりよせたい
奥戸澗に
- 五 さがみ横山
てるてのふめよ
妻のためとて
車 ひく
- 六 余り長いは
皆さまたいくつ
ここはよいとこ
中休み
- 七 月はさんやの
三日月さまよ
宵にちらりと
見たばかり
- 八 盆の十三日
やみの夜でけないが
思うたメラサド
皆しめる
- 九 おどりおどねば
朝までねせねア
ねせねアおかねアから
皆 おどる
- 一〇 うたえ うたえと
わしばかりせめて
わしアうたってたら
だれ せめる
- 一一 月はまんまる
夜 よけれど
わしの心は
しんの やみ
- 一二 あねこいたかと
まどから見たけや
ばばのみたしなこア
まど しめた

一三 十七、八なら

だきごろねごろ

そでのふりごろ

だましごろ

一四 空の星さえ

夜遊びなさる

わしの夜遊び

無理もない

一五 お前好きだと

手紙コやたけや

馬鹿なお方と

笑われた

一六 男ぶりより

金より心

わたしやお前の

気にはれた

一七 一人娘を

桜とつけて

花のさくたび

さかせたや

一八 しのび男と

羽織のえりは

着(来)てはおれども

外にお(折)る

一九 色の川ごえ

ひざくり たくて

深くなる程

帯を解く

二〇 月よ上るな

青葉の蔭に

わたし恥ずかし

しのび恋

二一 奥戸よいとこ

あわび 大漁

沖のこんぶは

皆 黄金

(二) きさらぎやんまの船唄

正月のひと夜二日の初夢に、きさらぎやんまの楠の木を、船に造りてはやおろす。柱しろがねせみこがね、はずや水繩は琴の糸、綾や錦の帆をかけて、舳(とも)に大黒、おもてにゑみす、おなか三社よおふな魂、よろづのたから積込んで、たからの島へはせこむ

(三) 屋敷直し唄 (どんづき唄)

一 良いくヨイくく

アリヤリヤンこりやらん 良いとナー

屋敷ならして 大願かけて

かけた大願ヨー 蔵七つ

二 良いくヨイくく

アリヤリヤン、こりやらん良いとナー

七つの蔵より それより宝

わしとお前のヨー 子家宝

(四) 大間灯台仕事歌

へチャンコ チャンコ

一 島の灯台 いつできる

沖の澗まに寄せる 下波は

働く二人の恋の波 アリヤ

あしたに胸は舞いおどる

チャンコチャンコ

二 島の灯台できたなら

二人来こようと約束したよ

御不動おふどの岩間でちかった恋はアリヤ

海の鷗も知っている チャンコチャンコ

三 島の灯台できたけど

かたみもろうたかいもなし

二人の夢もはたせずに アリヤ

今いまじゃ潮口しおぐちの泡あわとなる

(五) 大間盆唄

へハアー島のいづまから

白帆びはんがみえる

なくな島影しまかげノーオ

浜千鳥

へハアー来いと言うたとて

行かりよか佐渡い

佐渡は四十九里ノーオ

波の上

へハアー戀こいとゆう字を

分せきすれば

いとし いとしノーオ

したごころ

へハアー戀の九ツ

なさけの七ツ

合わせ十六ノーオ

まげ島田

へハアー遠くはなれて

あいたいときは

月かがみとノーオ

なればよい

へハアーお前百まで

わしや九十九まで

ともにしらがノーオ

はえるまで

へハアーやませ吹かせて

函館に渡る

あとは野となれノーオ

山となれ

へハアーお前さんなら

命もやるが

よその人ならノーオ

気もやらぬ

へハアーおどりおどるなら

しなよくおどれ

しながよければノーオ

嫁にとる

へ唄えうたえと

わしばりせめて

わたしやうたったらノーオ

誰がおどる

へしめた占めたと

井端でしめた

なるな井桁ノーオ

気もめる

へ大工さまより

こびき様にくし

しんのよいとこノーオ

引きかける

へとらせたいとや

この家のあみに

しびの五万もノーオ

とらせたい

へあみの目の数

ほに節の数

七里長浜ノーオ

砂の数

へしびの五万は

へ戀にこがれて

いとやしけれど

鳴くせみよりも

山で木の数ノオ

鳴かぬほたるがノオ

星の数

身をこがす

(六) 奥戸盆唄

一 盆の 十三日アほげアする 晩だ

七 大工様とは名は よいけれど

小豆こわ飯 豆もやし

真の心 は 曲り金

二 あのなアあね 娘どネロアねえなアどだば

八 曲り金とは世間の噂

口アあれ ども 恥しい

真の心 は つぼの糸

三 あ ねこたな くのに 木の根コたねンた

九 あねこ居たかと 窓から見たら

たなた木の根コ 物言はず

婆の見たぐなしゃ窓しめた

四 空の 星さえ 夜 遊び なさる

十 今夜踊らね ば朝まで寝せねエ

わしの夜びア無 理でない

寝ねえでおかねがら出て 踊れ

五月は 三夜の三日月様よ

十一 踊り踊るなら前より後

宵にちら りと見たばかり

後姿は 人 が見る

六 嫁コもらうなら手コ見て も られ

十二 今宵 一夜は浦島 太郎よ

手コ の太いのが 働き手

明けてくや しい 玉 手箱

(七) 数え歌 (二番の唄は不明)

一 ハアーでは 一つともせ

人目もあるのに 乗れ乗れと エー

乗ればまた動き出す走り出す

あらまた姐さん色ではないぞえ

人力車ごまのことじゃわいなー

三 ハアーでは 三つともせ

見たとき さほども大きくない

はめてみりやぎつしりいっばいで

あらまた姐さん色ではないぞえ

メリヤスパンツのことじゃわいな

四 ハアーでは 四つともせ

横にしようか縦にしようか

横の方より縦の方がやりやすい

あらまた姐さん色ではないぞえ

ソロバン玉のことじゃわいな

(八) 奥戸の鼻こ高いか低いか

タンタン 高道たかみち

うしろはレンゲの花見

チラカットツテモ 来いよ

夕夕道ゆきみち向いの山の

奥戸おくどのお花こ

高いか低いか

私わたくし知らんども 来いよ

(九) 磯節の替え歌 (新磯節)

私わたくしじゃ柿ししよの性しよで実じつは渋しぶけれど

サイシヨネ

一夜抱いて寝りや実も甘くなる

それにあなたは渋い顔して

何故逃げしやんす

(囃) 「サイシヨネ

手やて足やて叱られた

叱られながらも 手このべた」

空飛ぶ飛行機 あなたを乗せて

サイシヨネ

行くは玄海灘 荒波越えて

共に落ちてても アリヤ波の上

(囃) 「サイシヨネ

アーバツバド サイシヨネ」

(三) 大間小唄

御おんまゆしき 敷喜代志・作詩／菅野

正作曲

へ青い海原

／鷲わぶら岳たけろぎん・補作詩曲

へ怒濤のりきる

真ともですべる

若人たちに

八幡 紀国

のぼる朝日と

三島丸

潮のかぜ

かすむ海峡に

鯛に鮪に

ちらほら見える

昆布のかおり

しのぶ函館

沖じやかもめが

恋の街

今日も舞う

サアサ よいよい

サアサ よいよい

一度はおいで

一度はおいで

大間よい町よい港

大間よい町よい港

へ浮かぶ灯台

霧笛がひびく

別れ淋しい

栈橋で

フェリーボートの

テープが切れりや

暮れる波間に

灯がともる

サアサ よいよい

一度はおいで

大間よい町よい港

あお-い う なぼら まと-も て- すべ-え
 る やは-たき の -- く --に みし まま
 かい-きょう -- に ちら- ほ-ら みえ
 る しのぶはこだて こい-の ま- ち サアサよいよい
 いちどはお-いて お -お ま -よ いま ちい よい-みな-と

(二) 奥戸餅つき踊り

前唄 (ハア 出したり 出したり 出したり 出したり)
したり)

国はサイ

(ハア イヤコラ イヤコラ イヤコラ サ
ツサ)

国は京都の三条が町よ

三条二丁目の糸屋の娘

店も賑やか 暮しも繁盛

本唄

そろた そろたと チヨイ 餅つきそろた

秋の出穂より イロサ なおそろた チヨイ

(イヤヨイ ヨホホイ ヨイ ヨホホイ ヨ

イトーナ)

(アッ、ツケタガ ツケタガ コラサノサツ

サ ハア ソイ ソイ ソイ)

両方コホのよい所の チヨイ 舞いをまっつて

寄せたらよいと イロサ よいと よいと

チヨイ

(イヤヨイ ヨホホイ ヨイ ヨホホイ ヨイ
トーナ)

(アッ ツケタガ ツケタガ コラサノサツサ

ハア ソイ ソイ ソイ)

門カドに立てる チヨイ 祝の小松

かかる白雲 イロサ 皆黄金 チヨイ

(イヤヨイ ヨホホイ ヨイ ヨホホイ ヨイ

トーナ)

(アッ ツケタガ ツケタガ コラサノサツサ

ハア ソイ ソイ ソイ)

瀬田の唐橋 チヨイ 青銅カラカネの擬宝珠ぎんぼ

見るも渡るも イロサ 今はじめ チヨイ

(イヤヨイ ヨホホイ ヨイ ヨホホイ ヨイ

トーナ)

(アッ ツケタガ ツケタガ コラサノサツサ

ハア ソイ ソイ ソイ)

船は恵比須丸 チヨイ 船頭さんは大黒

右と左から イロサ 積みこんだ チョイ
後唄 ハア 長いや 皆さまの退屈 踊り手の退屈

ここはよいとこ サテ ささらさんときるよ サイ

(三) 大間四季の歌 (盛 壽作)

一 春は来たかよ大間の崎に

霞む渡島の山脈さして

船はすべるよ白帆をかけて

沖で鱒釣るそれや鮑さす

二 夏は来たかよ大間の崎に

呼べばこたえる函館山に

船は消えたよ夕日を浴びて

沖であ鳥賊釣るそれや昆布刈る

三 秋は来たかよ大間の崎に

室蘭通いの汽笛は澄みて

船は動くよ青海原に

沖であ鳥賊釣るそれや鱸巻く

四 冬は来たかよ大間の崎に

渡島嵐の北風やみて

船は浮ぶよすき通る海に

沖であ鱒釣るそれや鮑突く

(三) 大間稻荷神社神歌

(あーよいーよいーよいー)

(よいーやーなー)

天の岩戸 おし開く

(ちよいと) (あーこりやこりやと)

いざや神楽や 舞遊び

(ちよいと) (あーこりやこりやと)

神を勧めて伊勢踊り

(ちよいと) (あーこりやこりやと)

清が三尺の 剣を抜いて

(あー)

悪魔を払って それからせ

太平楽能を あらたまる

(ちよいと) ……

(四) 奥戸春日神社神歌

(あーよいーよいーよいー)

(ちよいと) (あーこりやこりやと)

悪魔を払って それからせ

(よいーやーなー)

神を勧めて伊勢踊り

太平楽を あらたまる

天の岩戸 おし開き

(ちよいと) (あーこりやこりやと)

(ちよいと) ……

(ちよいと) (あーこりやこりやと)

丈三尺の 剣を抜いて

いざや神楽の 舞遊び

(あー)

(五) 材木稻荷神社神歌

(あーよいーよいーよいー)

(ちよいと) (あーこりやこりやと)

悪魔を払って それからせ

(よいーやーなー)

神を勧めて伊勢踊り

太平楽を あらたまる

天の岩戸 おし開く

(ちよいと) (あーこりやこりやと)

(ちよいと) ……

(ちよいと) (あーこりやこりやと)

丈三尺の 剣を抜いて

いざや神楽の 舞遊び

(あー)

三 方 言

大間の方言にはいくつかの特徴がある。

① 書き表せない発音のもの。「エサエグベア」(家に帰りましょう)の「ベア」、「コチャキセエ」(こっちへ

来なさい)の「セエ」、「デエゴン」(大根)の「デエ」など。

② 清音が濁音になってるもの。サグラ(桜)、シロカデ(白勝て)、ハド(鳩)など。

③ 助詞の「ガ」を「ア」にする。「花子ア来タ」(花子が来た)、「烏ア啼エデグ」(烏が啼いて行く)など。

④ 方向を示す助詞の「へ」を「サ」にする。「ガッコウサエグ」(学校へ行く)、「山サエグ」(山へ行く)など。ここうした特徴を踏まえ、以下に大間の方言を掲げる。

へあ

あんべえわり

具合が悪い

あいでくせい

相手をするに足りない。相手不足

へい

あぐど

かかと

いふりこぎ

見栄坊。見栄を張りたがる者

あずまし

居心地がいい(拘束されない状態)

いいべ

いいだらう

あだる

①火に当たる、暖をとる。②食中毒

いがべ

どうだ、いいだらう

などに当たる

いずがかずが

いつかそのうちには

あつたらごと

あんなこと。そんなこと

いだわし

もったいない。惜しい(大間では人間だけでなく物品に対してもいう)

あつたらもん

あんなやつ

いっつから

ずっと以前から

あつちや

お母さん。向こう

いっつも

いっつもいっつも

あつぺ

反対。とりがえ

いっぺ

たくさん、いっぺい

あめる

食物が腐敗するちよつと前の状態

あんちや

お兄さん

いっぺ

たくさん、いっぺい

へう

うまぐね

うるがす

うるげだ

うるせ

へえ

えず

えずくらし

えへる

えんこ

へお

おがる

おごっこ

おずねん

調子が悪い。具合良くない

水に浸しておく

乾物を水に漬けて軟らかくなった状態

うるさい、さわがしい

しつくりしない。窮屈

眼に異物が入ったような異和感

すねる

大便

生える。育つ。成長する

おごっこ。漬け物

越年。新しい年を迎えること

おっかね

おが

おど

おぼんです

おべえだふり

おやぐ

おろぐ

へか

がが

かがてぐ

かすべ

かせ

がせ

かだつぽ

かだびっこ

かだる

恐ろしい。怖い

お母さん

お父さん

こんばんわ

知ったかぶり

①親類。②太陽の周囲に白い雲の輪

がかかる現象

家印の△記号で。魚のウロコが語源

お母さん

相手に立ち向かう

魚のエイ

食べなさい

ウニ(がんぜともいう)

片方

左右ちぐはぐ

仲間になる

かつちやぐ	引つ搔く	きかね	強い
かつちやます	ごちや混ぜに掻き混ぜる	きつくらへんき	ぎつくり腰
かつつぐ	追いつく	きつともつて	きつとそうだろう
がつば	舞子が履くようなぼつくり	きたね	汚れている。きたない
かつばがす	引つくり返す	きもやぐ	腹を立てる
かのげ	眉毛	きもやげる	腹が立ってむしゃくしゃする
かます	掻き混ぜる	へく	
かまどげし	倒産。一家がつぶれること	く	食べる
からくじ	口ごたえする	くせ	くさい
がす	海露、濃霧	くさらがす	腐らせる
からぼねやみ	無精者。骨惜しみ	ぐだつと	ぐつたりと
かる	買う	ぐだめぐ	不平を言う。ぐずぐず言う
かんつけ	他のせいにする	くちやべる	しゃべりまくる
がんべ	頭部の吹き出物	ぐつちやり	ぐつしより
がんべたがり	頭部にできもののある者。悪口に使	へけ	
う		け	食べなさい

第3節 民 俗

げだり

けっぱれ

けどこ

けせえ

ける

けろ

へこへ

こえ

こきたね

こちよがす

こつたらべっこ

ごっぺけす

こっぺくせ

ごんぼ掘る

笑い上戸

がんばんれ

首筋。首の後ろ部分

差し上げなさい。消しなさい。くだ

さい

あげる

ください。

疲れた

うす汚れた

くすぐる

少しばかり

やり損なう

おしゃま。小生意気

いつまでも駄々をこねること（だは

んこごと同義）

へきへ

さあさ

さがぶ

さぐら

さぐり

さつと

ざつぱ

さんじやぐ

へしへ

しのる

しみどふう

しみもち

しゃぐ

しゃっこい

しまった、やり損なつたという意味

を表す音声

叫ぶ

桜

隣家の境の板塀。隣室と境の板張り

簡単に。軽く

魚のあら。木屑

兵児帯へこおび

反る。曲げる

冬季に戸外へ出し一夜で凍らせる豆

腐。高野豆腐こうや

保存がきくしぱれ餅

杓子

冷たい

しゃべる

ただしゃべるだけでなく、主張する、
申し入れるの意

じり

きりよ
霧雨

じんぴこぎ

しゅれ
洒落者

へす

ずっぱり

いっぱい。たくさん

すてれんこ

片足跳び

ずなる

叫ぶ。怒鳴る

すま

隅

ずらずらつと

うわべだけ一通り

へせ

せがせる

せかす。急がせる

せこする

世話を焼く

せんづけ

一晩のイカ漁で一〇〇〇パイも捕る
大漁のこと。イカは一パイ、二ハイ
と数え、釣るといわず付けるといふ

へそ

そつたらこと

そんなこと

そつたらべっこ

たったそれだけ

そつちや

そちらへ

へた

だだ

父。お父さん

たいどとる

いいところを見せようとして気取る

たがらもん

実際の役には立たない者

たぐらんけ

ばか者。おつちよこちよい

だはんこぎ

ごんぼを掘る人、その人を指す

だはんこぐ

ごんぼ掘ると同義

へち

ちこ

乳

ちやつこい

小さい

ちやつちやつと

早く早く

第3節 民 俗

ちやんちやらお がしじや	笑止千万。片腹痛い	てぼっけ	手仕事の不器用な者。裁縫が得意な い女
ちよす	触れる。いじる	でめとり	日雇い労働者
ちよべつと	少し	てらっぱげ	つるつるはげ
ちよろつと	ちらりと。まばたきする間	でれき	ストーブの火掻き棒
へつゝ		へと	
つら	顔	どこにどこに	そんなことがどこにあらうかという 意味の打ち消し言葉
つらつけね	凶々しい	どすのまき	人をけなす悪口
へてゝ		どんづき	よいとまげ。どうずき
てかわ	裁縫用のゆびぬき	どんじや	刺子半天 <small>さしこはんてん</small> (昔の労働着)
てぎ	おつくう	へな	
てくい	魚のヒラメ	ながさる	泣けてくる
ですと	……だそうです	ながまる	横になる
てつけ	手(指)を失った者。手仕事のでき ない者	なげる	捨てる
ではる	前へ出る	なして	どうして

なすき	額	ぬげる	脱 ^ぬ げる
なまらはんか	中途半端	ぬったぐる	塗りたくる
なんぼ	いくら		
なんぼが	どんなにか。少し	へね	
なんもかんも	何もかもすべて	ねっちゃ	お姉さん
なんもなんも	どういたしましてという意味の打ち消し言葉	ねっぱらざる	ねばりつく
		ねまる	座る
へに		への	
にお	セロリ、ウドなどに似た香りのある植物	のきつと	のっそりと
にが	子ども	のたのた	のそのそ
にがこ	乳児	のな	ムラサキウニ
にどいも	ジャガイモ	のへらつと	ぼんやりと
へぬ		のぼせ	高血圧症
ぬがす	追い抜く	バイキ	馬を後退させる掛け声。もう帰ろうという意味
ぬぐい	温かい		
		へは	

はがいく
 ばぐる
 ばげ
 はだぐ
 はだげる
 はだこ
 ばっけ
 ばっち
 はばげる
 はぶり
 はらあんべわり
 はんかくせ
 ばんきり
 ばんとした
 へひ

はかどる
 交換する。取り換える
 晩
 叩く。殴る
 行儀を悪くする
 肌襦袢
 フキノトウ
 めんこ
 喉につかえる
 男の和装の上に羽織るつい丈の長半
 天。いばる。自慢する。もっかって
 いる
 腹の虫がおさまらない
 ばからしい
 始終。いつも
 立派な。上等な

ひかた
 ひっちゃかぶ
 ひとがたけ
 へふ
 ふぐらがす
 ふげ
 ぶつただぐど
 ふんむぐる
 へへ
 べが
 べご
 べごもじ
 へちよこ
 へなが

南西風の低気圧
 ひざがしら
 一回分の食事
 ふくらませる
 ひげ
 ぶんなぐってやるぞ
 引んむく
 ……だろわか(「来るべが」なら
 「来るだろわか」の意
 牛。仔牛は「こっこべい」
 米の粉団子の一種で、古くは節句の
 供物
 へそ
 背中

べつたらこい	ひらたい	まぐらう	食う。食らう
べつたらと	べつたりと	まげる	容器の内容物を空ける。勝負に負ける。安くしてもらう
へらかつぐ	食べ物が不足すること	まさがりかぼちゃ	まさかりで割るほど堅く実が締まっておいしいカボチャ
べんふる	世辞を言う	まっか	股
へほ		まっかい	まぶしい
ほいど	浮浪者	までに	ていねいに。念入りに
ほっぺだ	頬	まなぐ	まなこ。眼
ほまし	へそくり	まなぐつぶった	目を閉じた。臨終
ほめだれ	「帆前垂」と書き、商店名を染めた 宣伝用の大きな前掛け	まるこい	まん丸い
ほれ	ほら（注意を促す掛け声）	へみ	
ほげ	法界。盆中に墓前にご馳走を供える	みったぐね	みつともない
へま		みったぐなし	醜女 <small>しじめ</small>
ま	浜言葉で、船繋 <small>つな</small> ぎする場所	へむ	
まがなう	身支度する	むぐす	小便をもらす
まぐね	おいしくない。思うようにいかない		

第3節 民 俗

むぐれる
むったり
へめ
めっこ
めめず
めんこい
へも
もじゃっぺね
もちよこい
もった
ももた
もよる
へや
やいや
やがまし

ふくれる。すねる
常時
①半煮えのご飯。②盲人
みみず
可愛い
物事に乱雑なこと
くすぐったい
産んだ
腿。足の膝から上部
身仕度をする
あれまあ
うるさい

やばち
やませ
やめる
へゆ
ゆるがす
ゆるぐね
へよ
よいいか
よござ
へり
りぐつたがり
へわ
わがね

汚ない
東風を「本やませ」、低気圧の南東
風を「南やませ」
うずく。疼痛
ゆさぶる
楽じゃない
宵イカ。前夜に水揚げしたイカ
炉の正面（家長の座）
理屈を言ううるさい人
駄目

わっちやくちや

滅茶苦茶

わっぱ

曲げもの。弁当箱

わらし

子供全般

四 民話・昔話

本州の最北端という地理的な特徴と全く無縁とは思えないが、大間は他の東北地方の町村と比べ、寺社の勧請・普及や、交通の発達度に遅れが見られる傾向は否定できない。そうした事情と多少の関連性があるのかもしれないが、民話や昔話などの数も少ないようである（「金剛院」「蒼前石」「浄水盤」については本章第三節参照）。

(一) 地蔵様じぞうさま

大間日和山のお堂に四尺五、六寸（一三五―一三八センチメートル）ほどの、目鼻のはっきりしない地蔵様が建っている。この地蔵様は、今からおよそ三〇〇年の昔、大間沖で嵐に遭って沈没した船が積んでいたものであった。海が治まってから大間の人たちが総がかりで船を引き上げに行ったとき、船員たちは既に死んでいたが、大きな網に一体の地蔵様が引き上げられた。村人たちは「われわれの村に地蔵様が授かった」と喜び、お祝いを済ませてから、見晴らしのいい現在地に祀った。この地蔵様を和尚に見てもらったところ、海上安全の地蔵様とわ



写真11-19 地蔵様

かつて村人たちはさらに大喜びし、進んで「あげもの」を供え、参詣する習慣になった。ある冬の夜の十二時ごろ、白い着物を着た地蔵様が「寒い、寒い」と泣きながら歩いている姿を村人が見て、早速相談の未現在のような堂を建ててやったという。材木地域の人々も、材木石で囲まれた祠の中にひっそりと地蔵様を祀っているが、やはり海から救い上げたといい、大切に信仰している。

(二) 佐渡屋池
さどやいけ

鳥居崎の先、山崎納屋の後ろに佐渡屋池という池がある。今から五、六百年ほど前、まだ下手道の方にアイヌが住んでいたころのこと。佐渡屋船という大きな船で佐渡屋のお母さまという人が当地へやってきた。

ある天気の良い昼下がり、水の澄んだ大変きれいな池が近くにあり、お母さまは池のほとりに立って自分の姿を水に映しながら、髪を結んでいた。そうしているうち、池の水がにわかには波立って濁り出したかと思うと、かき消すようにお母さまの姿が見えなくなった。

間もなく、池の主はほかの池の主になり、佐渡屋のお母さまがこの池の主になったという。日照り続きでほかの池の水がどんなに減っても、この池はいつも満々と水をたたえていた。しかし、池のそばを通ると、昼でも幽鬼に誘い込まれるような不快感で気分が悪くなったという。

(三) 材木津鼻岬
ざいもつづばなせ

下北半島の地図に大間・奥戸が重要地点として記載されたのは、御花園天皇の康正二年（一四五六）である。材木は、大間町と佐井村と境をなしているが、その町境として現存しているのが津鼻岬である。

材木が集落として形成されたのは大間・奥戸よりさらに古く、長承二年（一一三三）のことである。清和天皇の貞観元年（八五九）、征夷大將軍坂上田村麻呂の遺児小佐井丸が半島を管理していた当時、蝦夷の来襲に備えて津鼻岬を柵として用いたのが「材木」の初めであるといわれている。

当時の大間・奥戸は見渡す限りの原野で、北海道から来襲する蝦夷は最短距離の大間崎を視点として船出したが、小佐井丸の本陣が当時は脇野沢にあったため、どうしても材木の津鼻岬を通らなければならなかった。津鼻岬が一〇〇〇年もの昔と変わらず巖として存在しているのは、第一にそれが材木岩であり、第二に砦ちかとして使用した直径一・一・五メートルに及ぶ巨石を積み重ねて作った柵のためである。

数千年の風雪に耐えてきた津鼻岬の突端と材木岩が至るところに露出しているさまは、まさに壯観の一語である。

(四) 四十八館しじゅうやちやん

下手浜に四十八館というところがある。昔、アイヌの館が四八建っており、外敵を防御するため周囲に土手を築き、その外側に壕を掘った。

あるとき、敵対するアイヌが大間に上陸し、四十八館を攻撃した。館のアイヌたちもよく戦ったが、敵の方が圧倒的に強く、周囲の土手を崩し、館に次々と火を放ち、ついに四十八館を全滅させた。館のアイヌたちは宝物を土中に埋め、あるいは村人たちに与え、その後は姿を消して行方知れずとなった。

この付近は大間崎のすぐ後ろの小高い段丘に当たり、津軽海峡が一望できる好位置である。この丘の下にはア

イヌが掘った井戸があり、水の枯れることがない。大正時代に弁天島に灯台ができてからも、灯台守の人々の飲料水として長い間利用されてきた。大間の古老たちは「アイヌは水を探す特殊な才能を持っている」というが、大きな川がなく水に恵まれない大間にとって、この井戸は貴重なものだったに違いない。

(五) 御洒落浜おしやればま

奥戸の材木寄りに流れる黒岩川に橋が架かっており、そこから海辺への道を少し行ったところに、御洒落浜という砂浜がある。

昔、浜の近くに、初恋に破れたショックで心を病んだ娘が住んでいた。彼女は毎夜、厚化粧をして浜に現れ、道行く人なら村人や旅人の区別なく呼び止め、抱きついていくという調子であった。

ある大雪の夜、娘に関心を抱いた村の若者数人が、大雪を心配して浜へやってきた。しかし、娘の姿はどこにも見えない。若者たちは、気の触れている娘のことゆえ、寒さに耐えかねて砂の中にもぐったのではないかと考え、あたりの砂を掘ってみたが見つかからない。ところが、砂を掘れば掘るほど周りに芳香が漂ってくる。彼らの一人が、あまりによい香りのする砂が出てくるので、その香りにひかれて砂を顔に付けると、不思議なことに醜い顔がたちまちのうちに美男子に変わった。

この話が村中に伝わり、中にはこっそりとこの砂を掘っては顔へ付ける人が少なくなかったが、一人として美男・美女になれた者はいなかった。きつとこの娘は、その男性だけを熱愛していたので、その若者だけを特に美男子にしたのだろうと村人たちは語り合ったという。

今はここを「おしやればま」とか「小舎利浜」といい、浜のすぐ後ろの崖の中ほどに小さな地藏尊を祀った祠ほら。

がある。昔この村に大飢饉があり、食糧も尽きたため年寄りをこの浜に捨てたことがある。祠はその霊を慰めるために建てられたもので、今でもお詣りする人が後を絶たない。また、浜辺の小石を持ち帰ると、その人の身内に不幸が起るといふ言い伝えがあり、拾ってきた小石は元に返させる習慣がある。そのために浜には白い石や鉛色の小石がたくさんあり、これが「舍利石^{じやりしじ}」と呼ばれ、御舍利浜の名の由来ともいわれている。

(六) 弁天島由来

あるとき、大間沖を通過していた帆船が嵐に遭って難破した。その後、そのあたりで漁をした漁船が網をさしたところ、弁天様が網にかかってきた。村人はこの授かり物に大喜びし、村を挙げてお宮を造り、祝うことにした。初めは今の灯台があるところを選んだが、そのころから島の周囲に座礁して壊れる船が多かったため、国で灯台を造ることになった。いろいろ検討した末、弁天様の祠のある場所が適地となったためお宮を移すことになり、島だと船でなければお参りできないともいう声が多く、結局四十八館の少し上のところへ祠を移し、旧三月三日の祭日には大勢の参拝者で賑わうようになった。

それから間もなく——大間の村人たちは同じような夢を見た。それは「私は蛇が嫌いなのに四十八館には蛇がたくさんいて困る。すぐ元の島に移せよ」と、弁天様がお嘆きになっている夢だった。

しかし、そう簡単に祠を移動させることもできずにいると、やがて毎日毎晩雨ばかりが降り続くようになり、一向に降りやむ気配もない。困り果てた村人たちが和尚さんにおみくじを引いたらうと、「島に移してくれと頼んでも移してくれないので、夜も安心して眠れない。雨降りには私の大嫌いな蛇が出ないので、毎日毎晩雨ばかり降らせている」とのこと。そこで再び、お宮を弁天島の北側に移し、弁天様を祀ってから、この島を弁天島

と呼ぶようになったという。

この話にはもう一説あって、村中の人が見た同じ夢というのが「真つ暗な晩に静寂を破って大暴風雨が襲いかかり、海は大時化^{しげ}、雷鳴はとどろく。その上怒り狂った竜が口から火を吹きながらやってくる。大間はたちまち火の海と化した——」というものである。これはお宮を島からこちらへ移したためのお怒りであり、まず凶事の起こらないうち
に元の島へお移しようという村中の総意で、現在地へ治めたということになっている。

(七) 弁天島奇談

弁天島で大謀網^{だいぼうあみ}の漁が行われていたころのこと。漁に来た一人の漁師が、夜になって眠るため、小屋の一角に横たわると、二年前からこの島へ来ているというもう一人の漁師が、「そこに寝るのはやめた方がいい、必ずうなされるから。そこではだれも寝る者がいない」と教えてくれた。しかし豪気の男はそんな忠告を気にも止めず、一気に眠り込んだ。

それから三日目の夜。寝ている男は、耳に響いてくる鈴の音に目を覚ました。その瞬間、ゾーツと寒気が襲いかかり、体は動かさず声も立てられないという金縛りに遭った。恐怖と金縛りから解放されたのは、しばらくたって鈴の音が鳴りやんでからだだった。彼は二度とこの場所で寝ようとはしなかった。その後も何人かの若者が島へ来ては「なんのそれくらいのこと」とばかり、例のとこで寝たが、いずれも二、三日のうちに青くなって逃げ出したという。

また、戦国時代のころ、蛇浦宗権^{じゅうらふそうけん}という落人が現在の折戸神社があるところまで逃げ延びてきたが、なおも追手が迫ってきたため、彼は弁天島に立てこもった。ここで数人の家来に堀を掘らせ、大謀網の小屋近くに軍用金

を埋めたという。そのころの島はまだ下手方面と陸続きだったが、後の世に村の若者たちが埋蔵金を求めて小屋近くを掘ったため、弁天島が下手と離れたという。落人の行方も、埋蔵金が出たか否かも、知る人はない。

(八) 材木石

昔、材木は「木の石」と呼ばれていたが、蛸崎の乱後に材木という地名になったといわれている。古くから知られている材木石から来たものという。

衣川の戦いで敗れ、北へ逃れてきた源義経が、松前の島（北海道）へ橋を架けようと計画した。奥地から牛に大量の材木を引かせてきたが、牛は疲れ果てて次々と死に、そのまま岩となった。牛とともに引かれてきた材木もことごとく石となり、これが材木石と呼ばれた。

現在の仏ヶ浦あたりで起こった出来事であり、その周囲から材木集落までに材木石が出るのはそのためだといわれている。

(九) 金剛院正信さま

大間町に伝わる話である。

「金剛院さま、おらの家の息子が、腹いたでころげまわっているすけ、どうか来てなおしてくだっせえ」

漁師の太助は、村はずれの若宮観音堂へ息せききってかけこんでくるや、お堂のおくへ大声でさげんだ。

「よっしゃー！」

大きな声とともに、ふつうの人より頭二つも背が高く、肩はばがががりしりした山伏の金剛院が出て来た。

太助の家では、五つになる太一たいちが、

「うあー、腹いてえよー」

と、ころげまわっていた。太助のかかあは、ただそばでおろおろしていた。

「さあ、金剛院が来てやったすけ、もうすぐなおると」

金剛院は太一の枕辺に、大きなあぐらでどかっとなると、

「なむ、ぎいだらそわか、よんたれわそわか……」

と、大声でお経をとなえると、黒いじゅうずをじゃらじゃら鳴らしていたが、とつぜん、

「ええ！」

と、それこそ屋根がふつとぶよぶよな気合いをかけた。

「そうら、だんだんお腹がなおってゆくぞ。そうら、なおってきた。なおってきた」

金剛院は、太一の腹をじゅうずでしゅかにさすると、いつのまにか太一は気持ちよさそうにすうすういびきをかいて、ねむってしまった。

「太助、太一は、目さめればもうけろっとなおっているすけ」

「ありがとあんした」

太助のかかあは、敷物のムシロに頭をこすりつけて、お礼をいった。

金剛院が、この大間村の若宮観音堂にすみつくようになってから、もう五年ほどになる。金剛院正信というのが、この山伏の名前であった。

金剛院正信は、ふしぎな法力を持っていた。呪文をとなえただけで村人の病気をなおしてしまうだけでなく、

雨をふらせたり、空を飛ぶカモメを地面におとしたり、ある時は、大荒れの海でそうなんしそうになっている小舟を、法力ですいすいと岸へ引きよせ、漁師たちを助けたこともあった。だから、大間村の人たちは、金剛院を生仏さまのようにうやまつていた。

ある時、北海道の松前町から、

『もう一ヶ月も魚が取れないので、みんななんきをしています。どうか、法力で魚を取らせてください』
という手紙があった。読みおわるや、

「よし、行ってやるべ」

という金剛院に村人たちは、

「あと五日もすれば、この観音堂のお祭りだすけ、それが終わったら行ってください」

と、たのんでも、

「それまでには、もどつてくらあ」

といつて、金剛院は小舟で津軽海峡をわたつて松前へ行つてしまった。

それから五日たった。きのうから海は大荒れに荒れていた。しかし、きょうから村の観音堂のお祭りだといつて、村人たちはつきつきとお堂に集まつてきた。

「なんぼ法力の金剛院さまでも、こつたらに海が荒れてれば帰つてこられるはずはねえべ」

と、村人のひとりが大声でいった時、

「ブオー、ブオー」

というホラ貝の音が、海の方からした。村人たちが戸をあけてみると、小舟に乗った金剛院が、雨と波しぶき

にびっしりぬれて、たった今、岸へ着いた所であつた。

「やっぱり、金剛院さまはたいしたものだ」

大嵐の津軽海峡を小舟で乗り切ってきた金剛院の法力に、村人たちはあらためて感心した。

——これは、今から三百年ほどむかしの話である。今でも、病人やなやみごとがあると、海のみえる丘にたてられてある金剛院正信の墓へ行き、願いごとをすると、きつとかなえられるといわれている。

(青森県児童文学研究会発行 北影介民話集「竜のなみだ」より)

(三) 七郎潟

大間と奥戸の間に、近くの山から見るといかにも静かな沼があつたといひます。白砂と呼ばれる大間と奥戸の境を流れている小川に沿って川伝いに川上へ上つてゆくと滝があります。この滝のところを上つてゆくと大きな沼があつたといひます。今は沼というより、水たまり程度の小さなものですが、これは周りが開墾されたためです。年寄りの人の話ですと、明治のころは、水を満々とたたえた大きな沼であつたといひます。そして、そこには小さな魚もたくさんいたし、水が澄んで底まで見えるよう、何となく飛び込みたいような気持ちになり、沼をのぞいてみると顔がちゃんと見えて、水の底から呼んでいるよう、寂しく無気味な感じのするところであつたといひます。

この沼は秋田県の八郎潟と兄弟であるそうです。そうして毎年夏になると、秋田県から甲をかぶり、鎧を着て槍を持ち、馬に乗つて七郎潟に会いに来たそうです。そして、ときどき馬の鞍や足跡が残っていることがあつたといひます。また、人々が晩に暗くなつてからここを通ると、何かが急に水ばたきをして水の底に隠れる

ことがたびたびあったということです。

今は、この付近は開墾されて、七郎瀧の伝説のおもかげをしのぶことさえできません。

(手塚源三郎氏のを参考)